

薩摩国日置北郷下地中分の研究  
——中分線の現地比定・西海から下司蘭まで——

高 島 緑 雄

A Study about *Shitaji Chūbun* in Hiokikitagō, Satsuma Province  
 —Identification of Classical Divisional line to Present Estate:  
 from Western Sea to *Geshizono, Geshi* “Home Dry Fields”—

Rokuo TAKASHIMA

In the present study, the identification of the classical divisional line, which was drawn in the illustrated map of *shitaji chūbun* (or the territorial division of estate) in Hiokikitagō, Satsuma province made up in 1324, has been tried for the present estate. This identification of the divisional line has been started by Yasushi Miki in 1971, and then the author has reported another opinion in 1978. Recently, Hideo Kuroda has suggested the compromise opinion in 1987.

The above three opinions coincide at the viewpoint that the divisional line traces up the Ookawa river starting from the Western Sea and joins the Yamanokuchi river of its branch. However, there are differences at the identification of the divisional line which turns to south from the Yamanokuchi river and then reaches the Yoshitoshi shrine. The difference of route among the above three opinions are shown in Figure 2 as follows:

by Miki:  $A \hookrightarrow A' \hookrightarrow A''$

by Takashima:  $B \hookrightarrow B' \hookrightarrow B''$

by Kuroda:  $C \hookrightarrow C' \hookrightarrow C''$

The opinions of Miki and Kuroda are not valid for  $A''$  and  $C''$ , since the divisional line in illustrated map does not coincide with the tangential line to cliff of Senjudōta but is only expressed as the contact point. The author has been repeatedly insisting the validation of the route  $B \hookrightarrow B' \hookrightarrow B''$  that the route illustrated in map of Yoshitoshi village in 1699 is considered as the divisional line with the contact point at Senjudōta. Figure 7 with the place name written in the divisional line illustrated map and the map of the Yoshitoshi village expresses the concluding opinion by author with respect to the identification of the classical divisional line.

## 《個人研究》

# 薩摩国日置北郷下地中分の研究

## ——中分線の現地比定・西海から下司藺まで——

高 島 緑 雄

### はじめに

この報告は高島緑雄・小国浩寿・葛生雄二の三名が、1992年から1995年までの連年四年間に、元亨4年（1324）「薩摩国島津庄薩摩方日置北郷下地中分絵図」（図1）が描出する現鹿児島県日置郡日吉町吉利北区を対象に実施した現地調査の成果である。調査は、①中分線の現地比定、②地頭所跡の現状、③領家政所跡の現状、④寺藺跡の現状、⑤下司藺跡の現状に限定した。そのうち①中分線の現地比定の「下司藺」から「大セタワ」までと、②・③・④・⑤については、『駿台史学』第97号（1996年3月）に「元亨四年『薩摩国島津庄薩摩方日置北郷下地中分絵図』の現地調査—中分線・地頭所・領家政所・寺藺・下司藺—」と題した研究ノートを掲載したので、本報告では筆者が担当した中分線の現地比定のうち、副題に表記する課題に限って、調査結果の知見を述べることとする。読者には本報告第4節に摘要した『駿台史学』の筆者担当部分と本報告を併読していただければ、筆者による「西海」から「大セタワ」に至る全中分線の比定案は、完結したことになる。

元亨4年8月21日「地頭代道慶・雑掌憲俊連署和与状」<sup>1)</sup>は、日置北郷の下地中分について、次のように記述する。

#### 日置北郷条条

##### 一両方界事

右、堺者、融于東西所立也、仍西者自帆湊之海、向東至于河登苦田橋、自彼橋南仮屋崎東道於世戸江、千手堂前能道於東江、自久留美野之大世多和、向東至于伊集院堺、<sup>但七曲</sup>通也、兩方堅守此旨為堺、北者為領家分、南者為地頭領、相互無違越、山野河海檢断已下所務、各可令一円進止之条、同于伊作庄矣、

同文書の「伊作庄条条」が、伊作庄を東から西に貫流する伊与倉河（現伊作川）に中分の境界を設定し、中分後に紛争が発生する余地が皆無であったのに対して、日置北郷の中分線は、吉利集落の中心を通過するために、文章では表現できない細部を絵図の作成によって確認する必要があったのである。中分絵図は日置北郷の全体を描出する領域絵図ではなく、中分線のルートを明示するため

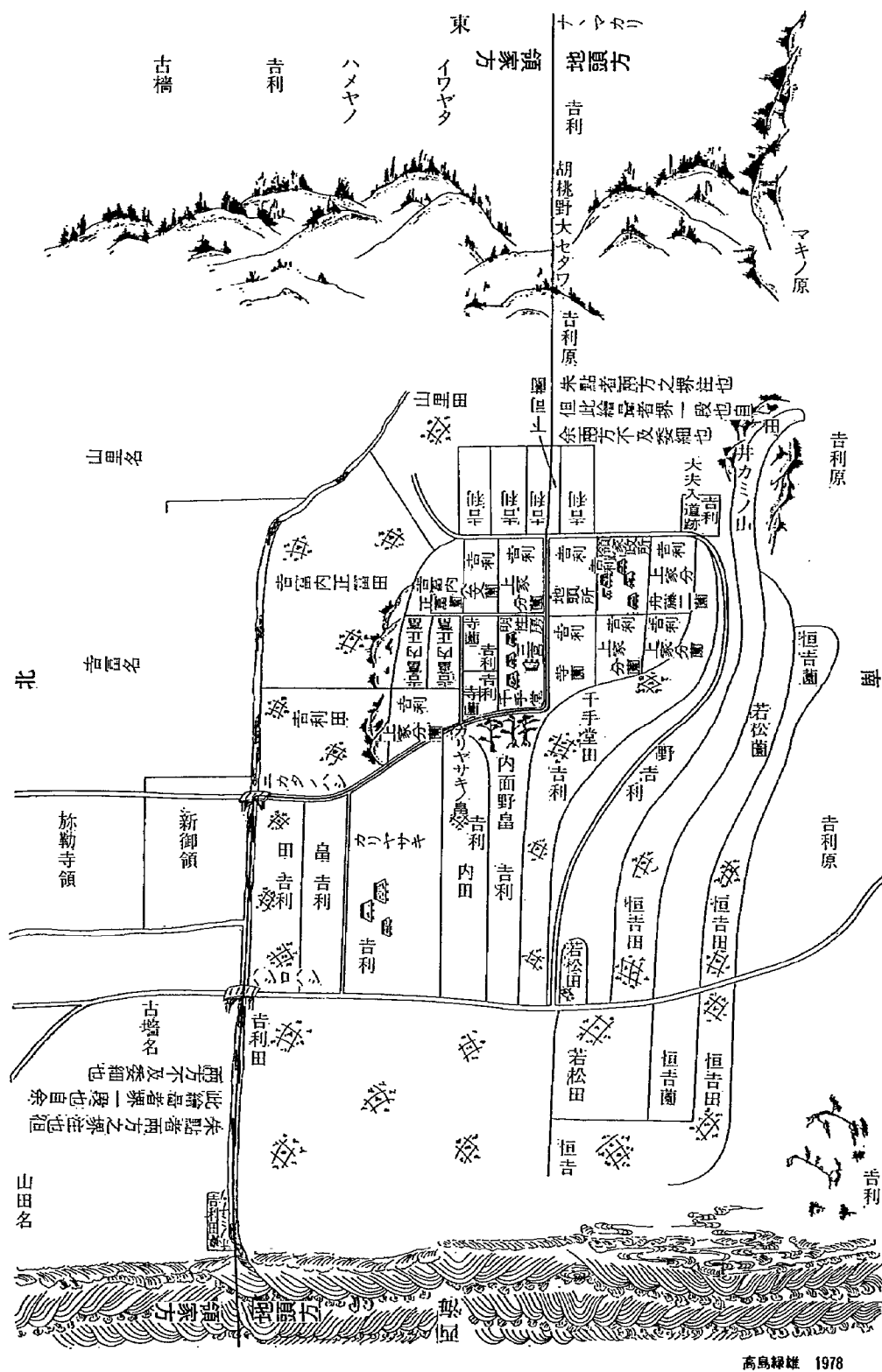


図1 元亨4年「薩摩国島津庄薩摩方日置北郷下地中分絵図」

〔島津家文章〕（縦62.2㍍×横97.2㍍）

に、その近辺の自然・地形・地物・土地利用・土地区画・名称にかぎって描出した。小山靖憲が「中分線に焦点を合わせ、その起点から終点到視点が移動するように描かれているので、前者（伯耆国東郷庄絵図——引用者注）の領域型に対し、導線型の絵図と呼ぶことができる」<sup>(2)</sup>とする所以である。

中分線の現地比定は、そのことだけが目的なのではなく、中分絵図が描く諸地物の配置を、現地に想定するうえに決定的な導きの線となり、中分後の領域支配の境界になるのであるから、解決されるべき重要な課題である。この課題に初めて本格的な解明を試みたのは、三木靖<sup>(3)</sup>であった。その成果は、たんなる中分線比定の問題に止まらず、絵図そのものの研究をうながしたものとして、高く評価できる先駆であった。その後、三木に学びながらも、異説を提示した筆者の比定案<sup>(4)</sup>に対して、三木の自説の補強<sup>(5)</sup>があり、また黒田日出男<sup>(6)</sup>・奥野中彦<sup>(7)</sup>の試みも続いている。三木・黒田に共通する比定案は、中分線を「千手堂田」の谷（現小字「瀬ノ下」）丘陵崖下に設定する点にあり、ひとり筆者だけが中分線を「千手堂田」の谷と関連させず、「ニカタノハシ」から南下する中分線（現町道西山・松ケ尾線）は、廃道を経て「瀬ノ原」の現町道外屋敷・尾立線に通じ、吉利神社東脇から東方山地大谷山南方の鞍部に向かうとする。形勢は筆者にとって、すこぶる不利である。しかし以下の行論で自説を補強して、いぜんとして自説に固執する理由を明らかにし、中分線論議の俎上に乗せたいと思う。

なお掲載の地図図版は、中分絵図の方位に合わせて、天を東、したがって左方が北であることに、とくに留意していただきたい。

## 1 中分線は「千手堂田」と接線か接点か？

図2により三木（A）・高島（B）・黒田（C）三者の比定中分線の相違を図示する。

三木：A⇒A'（小字「瀬ノ下」の谷口）⇒A''（「瀬ノ下」丘陵崖下の家屋列前面）⇒吉利神社と故寺園進家敷地間の坂道

高島：松ケ尾橋＝「ニカタノハシ」か⇒B（旧「日置久保園道」、現町道西山・松ケ尾線）⇒B'（西利邦家東脇の廃道）⇒B''（小字「瀬ノ原」の町道外屋敷・尾立線）⇒吉利神社の東道

黒田：松ケ尾橋＝「ニカタノハシ」か⇒C（旧「日置久保園道」、現町道西山・松ケ尾線）⇒C'（小字「瀬ノ下」の谷口）⇒C''（「瀬ノ下」丘陵崖下の家屋列背面）⇒吉利神社と故寺園進家敷地間の坂道

「西海」を起点とした中分線は、大川を遡上して旧大橋（図2の複破線）をくぐってから、支流の山之口川を遡上する。ここまではいかなる論者にも異論がない。問題のひとつは、中分線が山之口川から右折する地点にある。三木は大川と山之口川との合流地点から約200m上流を右折点とするが、そこには明瞭な徴証がない。むしろ三木の右折点、氏が中分線の一部に設定した「瀬ノ下」丘陵崖下の家屋列前面の線を、北に向けて自然に延長（A'⇒A）して、山之口川とぶつかった場所に求めているようである。

ところで絵図の中分線は、「ニカタノハシ」（＝苦田橋）から南下して東西列の小山の西端をかすめ



ら、比定線にそぐわない。筆者は絵図をこのように判読し、「ニカタノハシ」を現松ヶ尾橋に同定して、中分線の右折点とした。黒田は筆者に賛同している。

ところで中分絵図の「千手堂田」が、現吉利北区の小字「瀬ノ下」～「寺迫」の谷に該当することは、諸説すべてが一致する。ここは西北から東南に向かって台地に入り込む典型的な谷田である。谷の両側には顕著な崖線が連なっている。前述のように、三木は谷口からみて左手の崖下に連なる列状の家屋群の前面——したがって屋敷列とその目の前の水田との間に中分線を通す。黒田の線は三木とすこし違って崖の直下とするが、三木の線との間隔は、たかだか30㍍にすぎない（1：10000「吉利町全図」による）のであるから、両者の線は程度の差である。なお黒田の比定線が高島のB線から離れ、「瀬ノ下」の崖下に至るC'線には、なんらの徴証もない。ここで筆者が強調したい点は、中分線と「千手堂田」の崖線との関係を、どのように判読するか、ということである。中分絵図の「千手堂田」の谷には、明らかに両側に崖線が描かれている。しかし中分線は谷口からみて左手の崖線とまったく重なっていない。つまり中分線と「千手堂田」＝「瀬ノ下」左手の崖線とは、接線ではない。

ひるがえって中分線が、「三本木」で北から東に折れる角と「千手堂田」との関係をみると、そこは接点である。中分線比定の作業には、この点を確認することが、決定的に重要である。このような接点をもつ箇所を現地に探せば、現吉利神社の西南隅以外にない（ただし東折の角と「千手堂田」＝「瀬ノ下」の谷田との実際距離は約100㍍・比高約15㍍の急峻な人工の坂道）。筆者が頑固に「三本木」を現吉利神社境内とする理由の一つである。以上で比定中分線を「瀬ノ下」の谷の左手の崖線（A'・C'）に求めることの難点は、明らかである。

## 2 「地頭所」・「寺園」と「千手堂」等との位置関係

絵図の「地頭所」の所在（図3）が、図2・4の地頭所跡であることは、諸説がすべて一致する点である。この地頭所跡を基準面にして、周囲の区画を現地に特定することが可能である。その前提には、この絵図が日置北郷の「全体を描いているのではなく、千手堂以東の吉利集落の界線を詳細にし、文字で表現できぬところを補い、また集落中の蘭を分断する人為的直線を公示するところを課題としている」（三木）のであるから、「地頭所」付近は紛争の火種を残す余地なく、きわめて正確に描かれなければならない。この前提に立てば、「地頭所」西隣の「吉利 寺園」が故寺園進家の敷地であり、「明性房・三宮・千手堂」の跡は、中分線が東西に通る現町道外屋敷・尾立線を挟んで、寺園家とちょうど北隣に対応する小字「瀬ノ原」の5291・5292番地の畑に求める以外にない（図3・4）。この一画は東側を北から台地を深く刻むガリー（雨裂）状の谷で画され、南と西の二方を、後述する元禄12年「吉利惣絵図」が表す現町道で囲まれる、明らかな区画性をもつ場所である（ただし北の範囲は不明）。

「千手堂」等の跡をこのように特定できれば、そこ中分線＝町道を挟んで西に位置する「三本木」跡は、当然のことに現吉利神社境内となる。黒田によるこれらの現地比定は、一区画内に混在する堂祠を、図2の①・②・③のように分散させ、また氏は④「三本木」の比定地を特定していないが、図

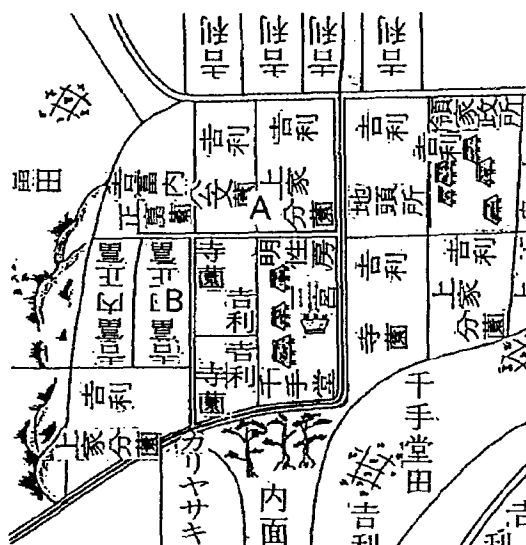


図3 中分絵図の地頭所・寺園付近

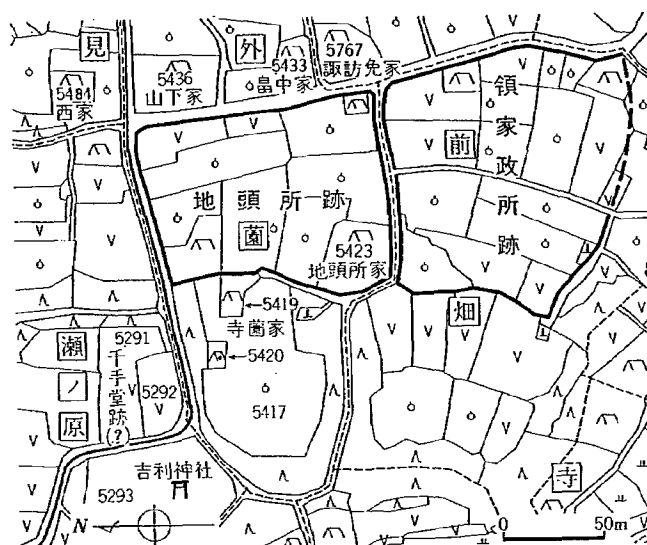


図4 地頭所跡・寺園跡の現状  
(日吉町地籍図・国土地理院空中写真 CKU74-16 C19-3  
1974年より作図)

2の黒田説④の場所に置いて氏の考えに反しなければ、そこは現「瀬ノ下」の崖下で、谷面に農家が連なる帯状の狭長なところにあたることになる。これでは「三本木」を「千手堂田」の谷に引き降ろすことになってしまい、台地上であることが確実な「内面野島」の東奥に「三本木」を描く中分当事者の空間把握から、著しく乖離することになる。黒田がいうように、中分絵図が「内面野島」の範囲を、伊集院～日吉～伊作を結ぶ現県道37号伊集院・日吉線に比定できる“大道”にまで延ばすのは不都合であるが、ひろびろと「内面野島」を描いているからには、そこを「瀬ノ下」の狭長な崖下に想定するのは、とうてい無理である。むしろ「内面野島」を「三本木」=現吉利神社西北方に展開する字「瀬ノ原」の町道外屋敷・尾立線以西の台地上一帯（図2）に想定するのが自然であろう。

同様に奥野が「千手堂」（これに「三宮」「明性房」を含む一郭）は、現在吉利神社境内地と推定されるが、その鳥居の下は急な崖となっている。『千手堂』前に三本の木を描くのは、その崖の下の情景であろう」とするのは、同じ理由で否定できる。要するに「三本木」を「瀬ノ下」の谷面に降ろす論は、まったく成り立たないのである。なお黒田が「もしもこれ（「三本木」—引用者注）を神社と見るならば、その隣に『三宮』なるもう一つの神社があることになり、やはり不自然である」とする筆者への批判は、やや強引であるが、中分当時「三本木」に神社はなかったという解釈を対置できないであろうか。もっともこの遁辞は、「なかったことは証明できない」歴史研究の禁じ手を冒すためらいを感じながらの発言ではあるけれども……。いったいに「明性房・三宮・千手堂」と「三本木」の比定地を、限りなく西北方向に動かしていく諸説は、そもそも中分線を「千手堂田」=「瀬ノ下」の谷の崖下に設定する結果である。中分線と「千手堂田」の崖線は接点であることと、「地頭所」・「寺園」・「千手堂」等の位置関係から、中分線を台地上の現町道に求め、「千手堂」等と「三本木」の跡を前述の場所に比定する高島説は、まだ合理性を保っていると主張したい。



薩摩国日置北郷下地中分の研究——中分線の現地比定・西海から下司園まで——

筆者のように「千手堂」等を、中分線が通る町道を挟んで現寺園進家の北に、「三本木」を現吉利神社に比定する案は、もう一つの効果をもたらす。図3の中分絵図のAとBの道であるが、両道とも複線で描出する主要な道として描かれる。そしてA道は、次節で触れる元禄12年「吉利惣絵図」に見え、地頭所跡と寺園家との間の道を北へ延長した谷道（現在は廃道）であり、B道も同様に「吉利惣絵図」に見える谷道（現在は廃道）に比定できるかも知れない。この想定が成り立てば、「千手堂」等以北の各区画の現地比定に、有効な手がかりを獲得することになるだろう。

### 3 元禄12年「吉利惣絵図」の道

日吉町教育委員会蔵・鹿児島県立歴史資料センター黎明館寄託の「薩州日置郡吉利惣絵図」（縦361㍺×横312㍺）（図5）の表書に、次の文章がある。

公儀就御用、御分国中縄引被仰渡、元禄十二年<sup>(元禄)</sup>己卯八月御検使差越、縄引被究置候、其節之絵図相損候ニ付、後年為不疑書写之、且永吉境論所重田ケ平永吉城足之訳を以、享保十一丙午年、大御支配之節、郡奉行三原武兵衛御検使ニ而、永吉<sup>ニ</sup>被召付候故除之、同年七月郡奉行同人御検使ニ而、被成下候重田ケ平返地伊集院入佐村之内芋野、書加置之者也、

于時宝暦三癸酉年十月吉日

これによると、元禄12年（1699）に作成された絵図を、宝暦3年（1753）に「書写」したものという。さて筆者の方法は、この絵図を媒介にして、中分絵図の道を現在の道路に結びつけようとする試みである。ここでもっとも注意すべきことは、元禄絵図の道で現在の町道に比定できない廃道を現行地図上に復原し、逆に元禄絵図が描いていない現在の町道を、頭のなかで消去することである（図6）。まず廃道をみる。中分線が「西海」から大川を東に遡上して、前述の中世の“大道”と交わる地点に架けられた「ハシロハシ」に該当する橋は、元禄絵図に「大橋口」という杭が立つ「大橋」である。この土橋は現在の県道に架かる大橋から約100㍺上流にあった（図2）。ちなみに現大橋のコンクリート製架橋銘文に「昭和三十四年三月」とあり、大橋の移築は地元の方々の記憶に新しい。したがって現県道から東南にはずれ、旧大橋で大川を渡るルートは、廃道である。また「外屋敷」の集落からふたたび県道に戻るルートも廃道である。その他、前節で触れた西北から吉利の台地を刻む谷道、寺園進氏居宅東脇の道から現町道と直交して北へ向かう谷道、「北方」と注記する道から東へ向い、山之口川の谷に降りる谷道などが廃道である。ちなみに江戸時代にも、谷が道に利用されていることに注意を払っておきたい。

次に元禄絵図と現在の町道とが一致する道路を検討してみる。三本は中分線の高島案に対して、「現在瀬ノ原にある町道は吉利<sup>(元禄)</sup>絵図では、吉利神社に近いところで瀬ノ下<sup>(元禄)</sup>に下っていてそれ以後にできた」とされる。たしかに元禄絵図は、「御霊大明神」＝現吉利神社脇で「瀬ノ下」の谷に下る人工の急坂があり、また同じく寺園家南側の急坂を明確に描くが、それとともに神社の東側から北側をま

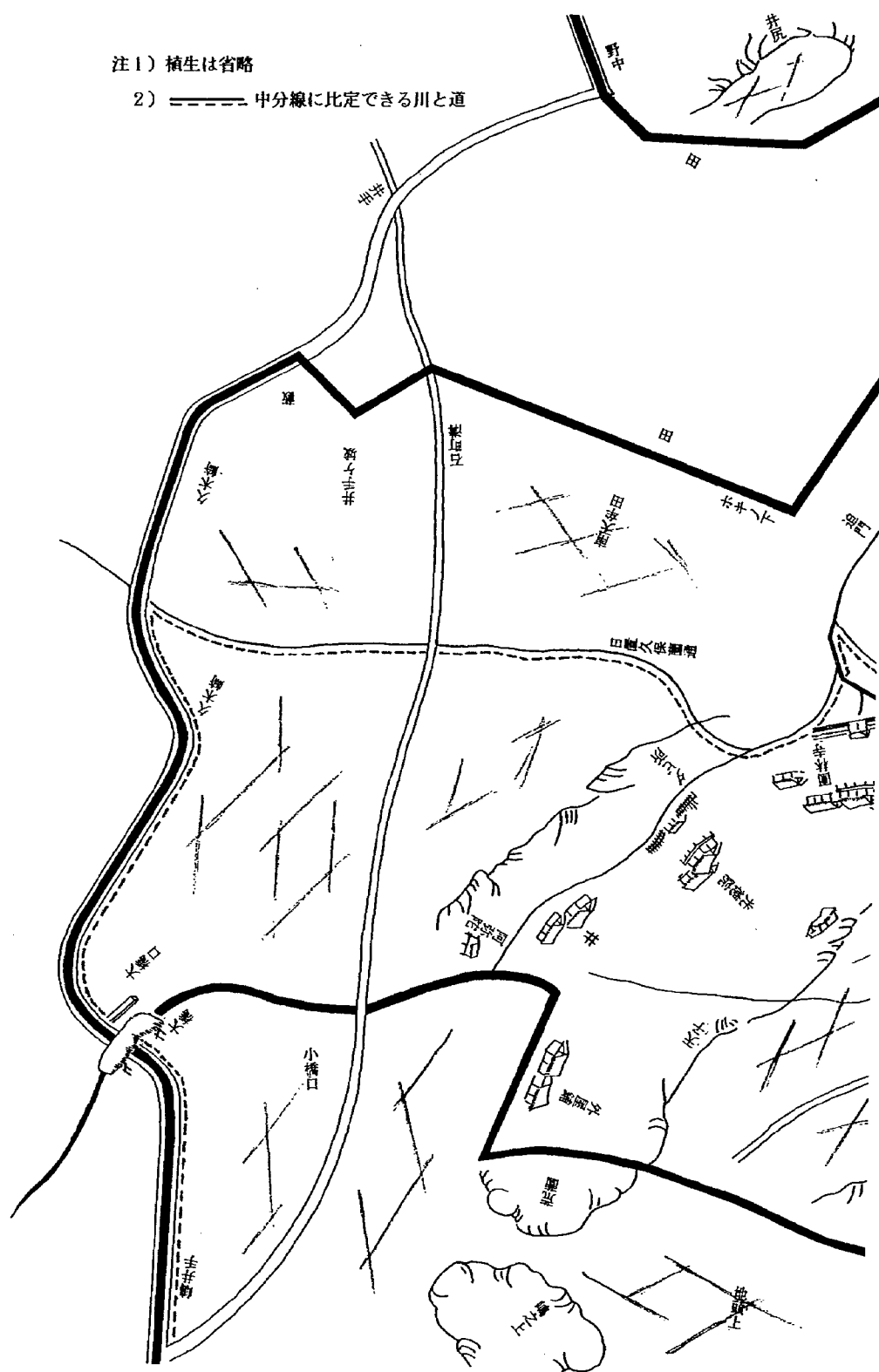


図5 元禄12年(宝暦3年模写)



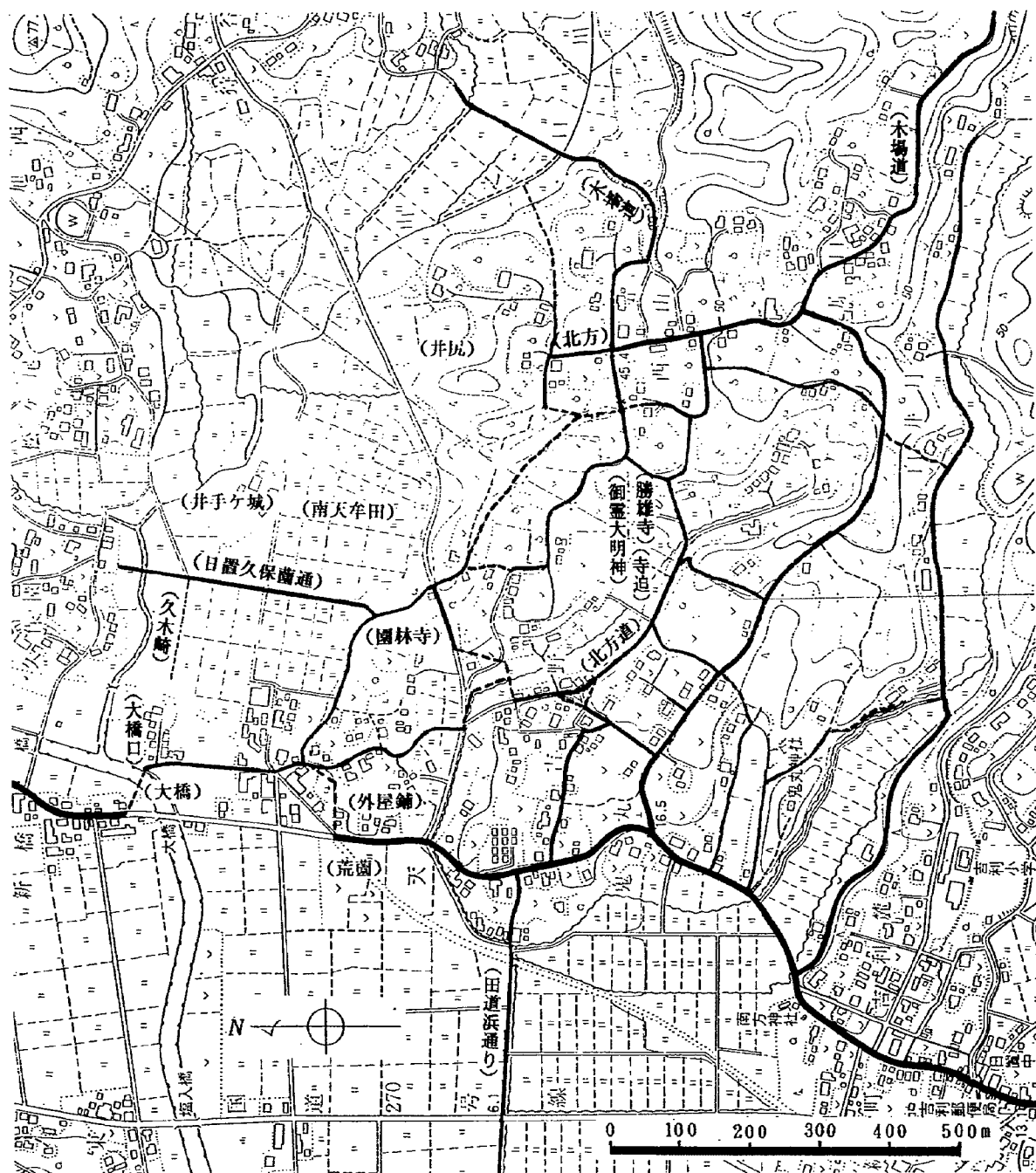


図6 元禄12年「吉利惣絵図」の道の現地比定(部分) 1:10000「日吉町全図」

注1) ( )内は「吉利惣絵図」の表記

2) 実線は、現在の道に比定できる「吉利惣絵図」の道

3) 破線は、「吉利惣絵図」道で、現在は廃道

薩摩国日置北郷下地中分の研究——中分線の現地比定・西海から下司園まで——

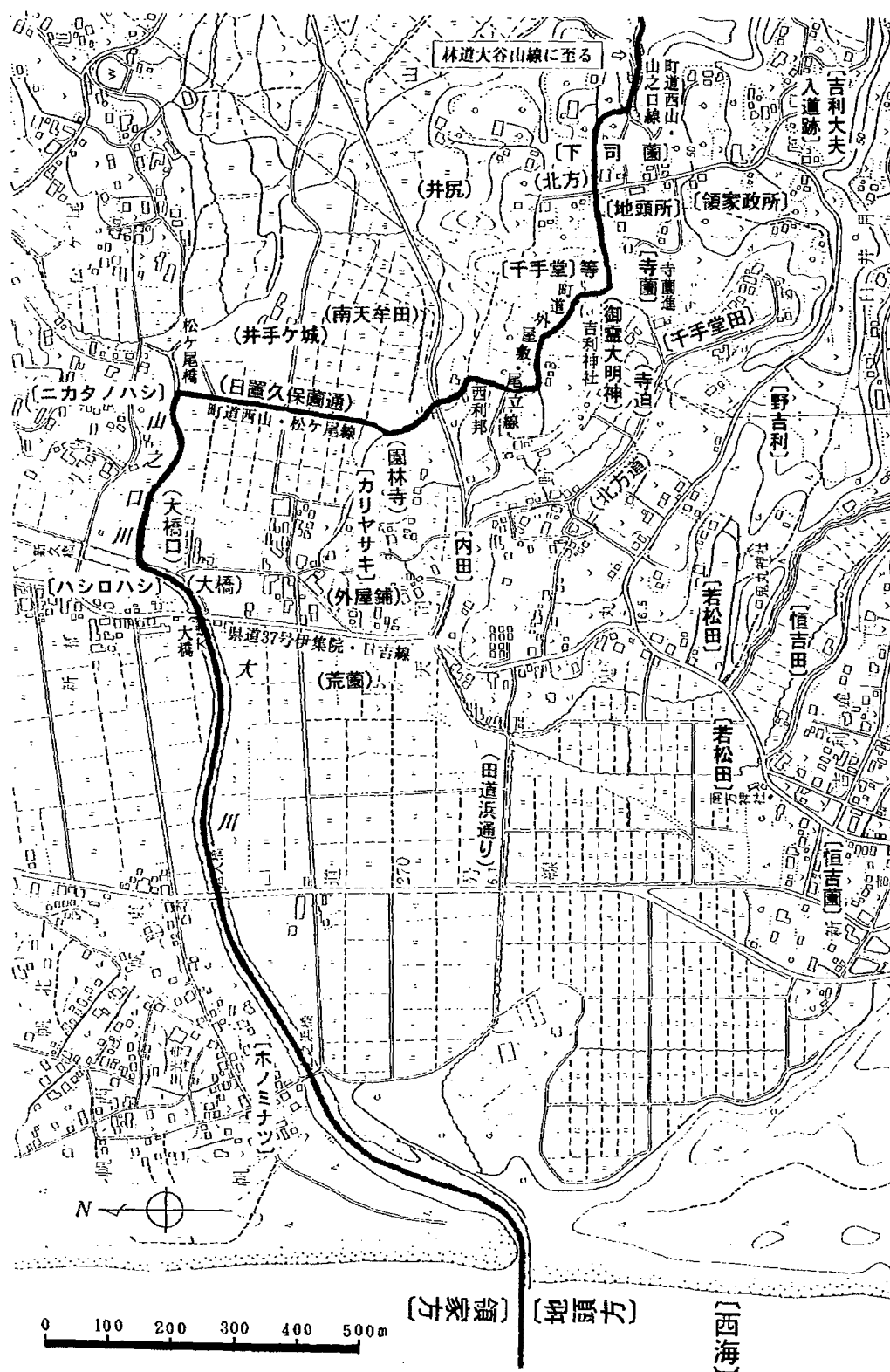


図7 中分線の現地比定 (高島案) 1:10000『日吉町全図』

- 注1) [ ]内は中分線の表記  
 2) ( )内は「吉利惣絵図」の表記  
 3) 明朝体は現称

わって西へ向かう道を確実に描いている（図5・6）。三木はこれを見落としているのではなかろうか。ただし直行して現県道に達する道は元禄絵図になく、途中で北に折れ、現西利邦家東脇の廃道と「園林寺」（現在は廃寺）の東を経て「日置久保藺通」に通じる。このように一部の廃道を媒介に、吉利神社の東から西⇒北⇒西北のルートを経て「日置久保藺通」につながる現町道が、中分線の一部と結論できる。結果は図2のB⇒B'⇒B''である。これを1:10000「日吉町全図」に転写した中分線比定図が、図7である。そこでふたたび誤植を訂正した旧稿を再録して、中分線の高島案とする。

中分線は大川・山ノ口川の合流点で大川を離れ、山ノ口川を東にさかのぼって「ニカタノハシ」に到達する。現在の松ケ尾橋であろう。ここから中分線は、「彼の橋より南仮屋崎の東道」から「世戸」を通過して、「千手堂の前の道」を東へ向う、という。現在、松ケ尾橋をまたぐ南北の農道が、水田を横断して南端で吉利北区の台地にとりついているが、この農道が元禄12年「吉利惣絵図」にいう「田置久保藺通」にあたるとして間違いない。松ケ尾橋～日置久保藺通が中分線である。そこから中分線は、水田面から比高20メートルほどの傾斜を東南にむけて台地を登っていく。その途中で「仮屋崎」とか「世戸」を通過するという。絵図には、三軒の住宅を描示する「カリヤサキ」の集落と「カリヤサキノ島」がある。現吉利北区に「仮屋崎」という小字はないが、絵図上の集落は、現在の小字「外屋敷」にあたるだろう。また享保8年の「竿次帳」（『日吉町郷土史』史料編所収）によると、外屋敷門の東に仮屋崎門があったから、中分線は小字「外屋敷」の東端を通過していることになる。そこから西利邦家東わきの廃道を抜けて、小字「瀬ノ原」の開けた台地上の島に達する。「瀬ノ原」には鍵の手に五回屈曲する町道が東西に通り、最後の曲り角が千手堂の跡である。絵図の松の木（楠木か榎か——筆者後注）らしい大木三本をえがいたところは、現吉利神社であろう（旧称御霊大明神）。西利邦家より先の町道が中分線なのである。

#### 4 むすびにかえて—「下司藺」以東の中分線比定—

絵図の中分線は、「下司藺」を通過すると、突然に具体性を失い、きわめて観念的で抽象的に直線を描出して「大セタワ」に向かう。和与当事者がこのような描示でも、中分境界を合意できた理由があったはずである。その鍵は中分線が「大セタワ」の直前で越える小山にあると思われる。

絵図が大和絵の手法のかぎりで写實的に描いた東方山地の山容は、誰でもが感得するように、「西海」の砂丘裏から眺望したそれと非常に似ている。絵図の山稜線を実際のそれに特定するポイントは、現称「鷹取場」という「大セタワ」の鞍部である。したがって「大セタワ」北の山稜線は、現大谷山（標高263.8㍎）、南の山稜線は現横道山（標高220㍎）に同定でき、「大セタワ」は大谷山と横道山の下降稜線が合わさる標高190㍎の鞍部になる（図8）。「タワ」・「タオ」・「トウ」は峠の同義であって、「大セタワ」は「オオセ峠」を意味する。

ところで、絵図は大谷山の前衛に、南の稜線が大谷山のそれと重なる山を描く。筆者はこの山を現地観察と地形図判読から標高180㍎の瀬之上山とする。したがって中分線は瀬之上山の山頂を通らな

薩摩国日置北郷下地中分の研究——中分線の現地比定・西海から下司藺まで——

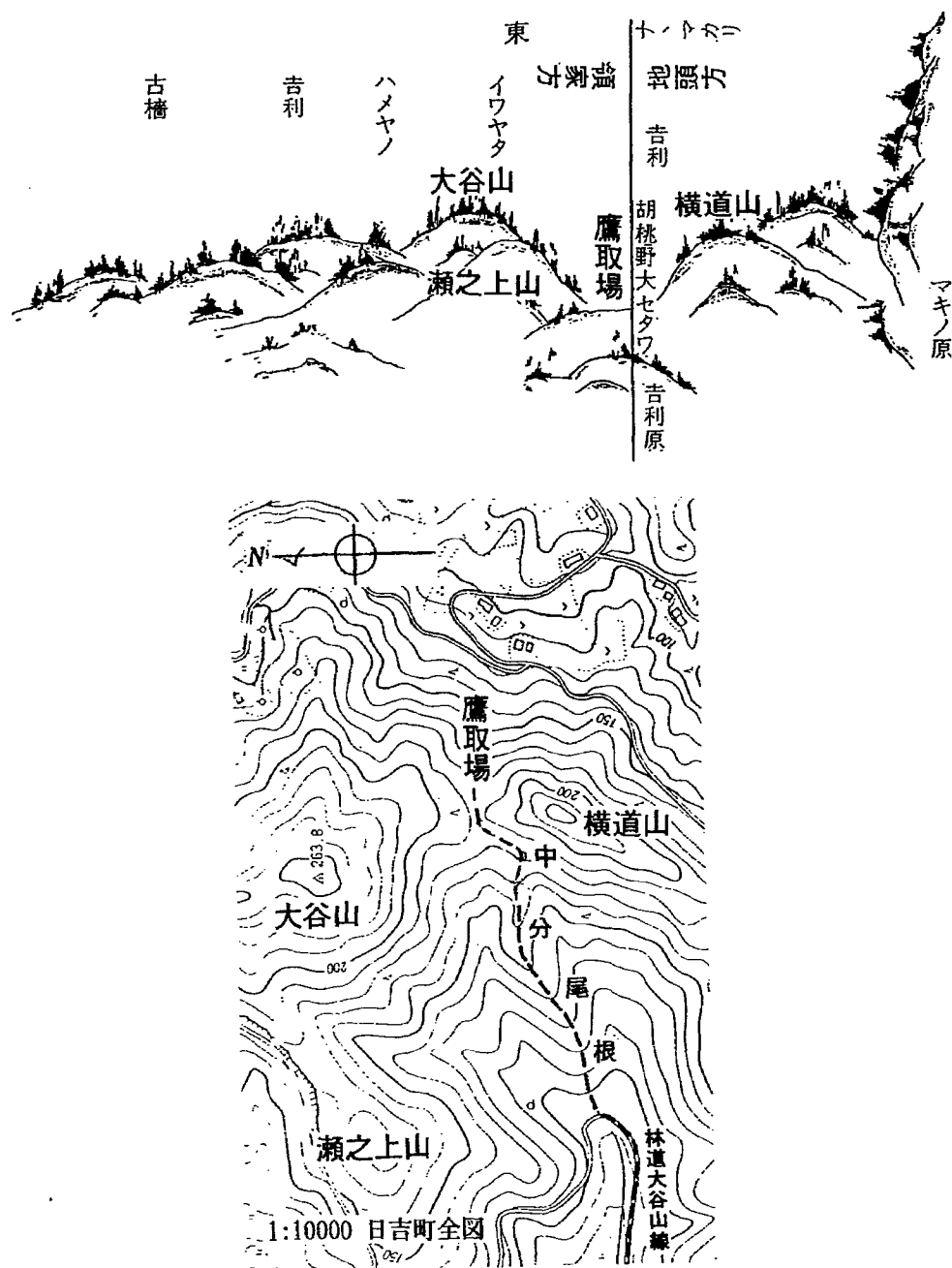


図8 「大セタワ」=「鷹取場」を通る中分線

い。筆者を含めて多くの論者が、瀬之上山を中分線が通過するのではないかと断言をいどくのは、砂丘裏から中分線の大川と山之口川に沿って歩くと、瀬之上山の山頂が「大セタワ」=「鷹取場」の鞍部を隠して、せりあがってくるからである。ならば中分線が通過する小山はどこか。筆者は図8の地形図により、鞍部から西に派出する独立の尾根と判断する。図8の“中分尾根”である。この尾根は吉利の一・二の場所から望見できるが、多くの場所では瀬之上山の山体に隠れて実見できな

い。絵図は実見不能の“中分尾根”を瀬之上山の前面に“取り出し”て、中分線の通過ルートを明示したのである。したがって「下司蘭」以東の比定中分線は、現町道西山・山之口線⇒林道大谷山線⇒“中分尾根”⇒「鷹取場」=「大セタワ」となる。

以上で筆者による「西海」の大川河口から「大セタワ」に至る中分線比定は、完結した。その間の直線距離は、3600mである。

## 注

- (1) 「島津家文書」(『鎌倉遺文』28801)
- (2) 小山靖憲「荘園制と荘園絵図」(和歌山市立博物館'90秋期特別展『荘園絵図の世界—紀ノ川流域を中心として—』所収 1990年)
- (3) 三木靖「薩摩国伊作庄内日置北郷下地中分絵図の問題点」(鹿児島短期大学『研究紀要』7 1971年)
- (4) 高島緑雄「辺境荘園の領主と農民—薩摩国伊作庄・日置北郷—」(西垣晴次編『地方文化の日本史』3 所収 1978年)
- (5) 三木靖「島津荘薩摩方伊作庄日置北郷の下司と地頭」(竹内理三編『荘園絵図研究』所収 1982年)
- (6) 黒田日出男「領主の争いと荘園の分割—薩摩国伊作庄日置北郷下地中分絵図—」(小山靖憲・佐藤和彦編『絵図にみる荘園の世界』所収 1987年)
- (7) 奥野中彦「薩摩国伊作庄内日置北郷下地中分絵図」(荘園絵図研究会編『絵引荘園絵図』所収 1991年)

〔付記〕現地調査にあたり、日吉町教育長今中一芳氏・地元研究家瀬野富吉氏・吉利北区在住の町会議員諏訪免 是氏・故寺蘭進氏・大富義雄氏に、多大なご教示とご便宜を賜った。記して厚く感謝する。

(たかしま ろくお)